

説教：「希望があるから」

聖書：ローマの信徒への手紙5：1～11

先週行われた辺野古の埋め立ての是非を問う県民投票。人々の持つ希望がこの投票の実施を後押し、人々の希望があつた結果を導き出しました。希望という言葉を使い換えるとすれば、わたしたちにとっては、たとえば「明日も生きていくことができる」という確信である。といえるかもしれません。

パウロはローマにいるキリスト者たちに対して、「希望は私たちを欺くことはない。なぜならば、私たちに与えられた聖霊を通して、神の愛が私たちの内に注がれているからである」と書き送っています。

3節以下は注意深く読む必要があります。ここはこれまでよく、「艱難・苦難の中にあつても耐え忍べば、練達の域に達して、そしてそこからやがて希望を持つにいたる」という読み方がされてきたところですが、私たちは神の恵みというのはそのように修行をして鍛錬された者に対してご褒美のように与えられるのではない、ということを知っています。

また4節の「練達」はもともとのギリシア語の意味から、「確証」(確かな証拠、ゆるぎないもの)と置き換えたほうがパウロの言わんとすることをよく伝えるでしょう。パウロは、艱難、忍耐、確証、希望、と4つの段階に並べていますが、様々のことを潜り抜けて最終段階として希望を得る、ということをおうとしているわけではありません。なぜならこの5章の1節からの中で、パウロは「私たちは主イエス・キリストを通して、信仰によって恵みへと至る道を獲得しており、今や私たちはその恵みの中に立ち、神の栄光にあずかる希望を誇っている」のだと言っているからです。つまり希望は、いつか、やがて得られるものではなく、私たちは始めから希望の中に身を置いているのです。なぜなら、私たちのイエス・キリストがすでに私たちの傍らに立っておられるからです。イエス・キリストの希望に満たされているわたしたちは、神との関係において確信を持っており、だからこそ忍耐することができる。だからこそ苦難・艱難の中でも誇りを持ち続けることができるのです。

イエス・キリストによる神と人の和解は、私たちが苦難の中でも神を誇りとし、希望をもって立ち続ける根拠なのです。(國分美生)